

北太平洋におけるアカイカの漁期拡大と漁場拡大に向けた取り組み — 海洋環境に基づいた漁場形成要因の検討 —

底魚・頭足類開発調査グループ 加藤 慶樹

いか釣り業界では、スルメイカを対象としたいか釣りの記録的な不漁や外国漁船の無秩序な漁業によって、安定的な操業が困難となっている。このような状況を受けて、開発調査センターでは、安定的な漁業経営および加工原料の安定供給を目的として、アカイカ資源利用拡大に関する調査を行った。本年度は下記の項目に関する調査を実施した。(1)漁期拡大および西経域への漁場拡大の可能性の検討、(2)探索指標検討のための漁場形成要因の解明、(3)資源の効率的利用に向けた移動回遊生態の検討および生物学的知見の蓄積。

操業位置での漁獲量を図に示す。

4月には西経域の表面水温 20°C 付近の海域で調査を実施した結果、主に新たに確認された冬春生まれの産卵群が漁獲された。しかし、これらはまとまった漁獲とならなかった。このことは、産卵期には捕食量が低下するため漁獲されにくいという生物

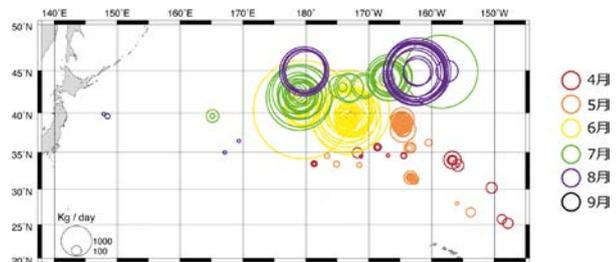


図. 調査点での漁獲量 (kg/day)

学的な理由による可能性と、透明度の高い沖合域で集魚灯を用いた従来漁法がそぐわないという技術的な可能性によることが考えられる。5月には南方から亜寒帯前線に向けて北上しながら調査を実施した、4月と比較すると漁獲は増加したが、当業船並のまとまった漁獲にはならなかった。6月になると、西経 170~180 度付近の亜寒帯前線の近傍に漁場が形成されていた。7月から8月にかけて、東西に広く調査した結果、西経 160~170 度付近においても、東経域もしくは日付変更線付近の従来漁場の漁獲に匹敵する漁獲が得られ、相応の漁場形成の可能性が示唆された。漁獲されたものは、未熟雌からなる秋生まれ群が加わり優占した。8月もこの群が成長しつつ引き続き漁獲の主体となったが、新たに冬春生まれ群の加入が始まっており、これらが漁獲を継続させた要因である可能性が高い。なお、本漁場は数値シミュレーションから得られた結果と同様、亜寒帯前線域の北側に漁場が形成されていた。9月には、日本近海で数回調査を実施したが、まとまった漁獲はなかった。

現在、アカイカを対象としたイカ釣り当業船では夏季 1 航海のみ実施されているが、本結果より 2 航海実施の可能性も示唆された。今後は、例年日付変更線付近で漁場形成される秋生まれ群の漁場の広がりを確認するとともに、西経域で新たに確認された冬春生まれ群および日本近海において冬季に漁獲される冬春生まれ群の、長期的な回遊の追跡による漁場形成機構の検討が主な課題としてあげられる。